

「妊娠中からの母子支援」即戦力育成プログラム なぜ、今、助産師キャリア支援なのか？

中塚 幹也

岡山大学大学院保健学研究科, 岡山大学病院 産科婦人科, 岡山県不妊専門相談センター

キーワード：助産師, 就労支援, 離職防止, e-ラーニング, シミュレーショントレーニング

Skills-upgrade courses and support system for career development for midwives at Okayama University

Mikiya Nakatsuka

Graduate School of Health Sciences, Okayama University, Department of Obstetrics and Gynecology, Okayama University Hospital, Okayama Consultation Center Specializing in Infertility

はじめに

現在, 日本全国で, 安心してお産のできる場所の減少, そして「分娩過疎地域」の拡大が見られ, 子どもを持つという基本的な権利が脅かされつつある. この中で, 産科医療スタッフの不足は, 周産期医療崩壊の大きな要因となっている. 助産師は全国で6,700人不足していると報告されており, 産科医と同様に, 実働助産師は大都市, 大病院に偏在している. このような近年の社会状況下で, 現役助産師には, 助産師外来での妊婦健診や自立した分娩介助を行うことが求められており, このためには, 胎児超音波検査の技術や最新の医学的知識などが必要となっている.

しかし, 本来, 助産師は, 思春期, 妊娠・分娩から子育て, さらに更年期まで女性の一生を支援するという役割を担っている. このため, 妊婦の管理や周産期の知識は勿論のこと, 性教育, 生殖医療, 流産を繰り返す不育症, 妊娠期から継続した子育てなどの知識と支援能力とが求められている.

これに対して, 現場の助産師は非常に多忙であり, 学習意欲は高いものの, 多様な女性のニーズに応えるための系統的な知識や技術を, 継続して習得する余裕がない. 一方, 助産師・看護師免許を持ちながら, 結婚, 妊娠, 分娩, 親の介護などを機に家庭に入った女

性は, 元来, この分野に関心が高く, 就労する意欲も旺盛なことから貴重な人的資源である. その現場復帰を支援することは, 有効かつ現実的な施策の1つである.

現場の第一線から家庭に入った助産師・看護師が医療現場への復帰を躊躇する原因としては, ①医療現場から離れていることによる最新知識の不足, 技術の低下, ②職場の人間関係への不適応などの不安, ③子育てや親の介護などのため生じる勤務形態の制約が挙げられる.

また, これからの産科医療の担い手である助産学生, 看護学生であるが, 就職しても, 学校教育と臨床の現場とのギャップについていけずに離職する例が増加していることが知られ, リアリティショックとして問題となっている. 新卒看護師の1年以内の離職率は8.8%と報告されており, その背景には, 臨床で必要となる専門的な知識・技術の不足と, 職場で人間関係を築けないことが挙げられている. これは, 新人スタッフのみの問題ではなく, 職場における年長者のコミュニケーション能力の不足も大きく影響している.

プログラムの変遷

2006年度, 岡山大学大学院保健学研究科では, 人材不足が深刻な周産期診療を担うため, 助産師・看護師免許を有する社会人等を対象とした社会人キャリアアップ教育である『「助産師」再生のための専門教育支援プログラム』を提案した. これが, 文部科学省の再チャレンジ支援総合プログラムに採択され, 2007年度には「周産期医療に関わる医療スタッフのためのステッ

平成21年9月受理
〒700-8558 岡山市北区鹿田町2-5-1
電話：086-235-6895 FAX：086-235-6895
E-mail：mikiya@cc.okayama-u.ac.jp

プアッププログラム」を企画、周産期医療に関連する各種のテーマで4回のセミナーを行った。

2008年には、「産科医療の即戦力育成に向けた看護学生と現役助産師の相互ステップアッププログラム」が、岡山大学の学内COEに採択され、就労・非就労の助産師に、試験的に数名の助産学生が加わり、ともに学習した。セミナーを6回に拡大したこともあり、中四国、近畿、九州からの受講生はのべ約100名に達した。また、2009年度の本格始動に向けて、講師陣を充実、1年間のカリキュラムを作成して全国に受講生を募集した。

2009年2月に、看護師・助産師免許を持つ20～50歳代の就労・非就労女性22名を選抜し、4月には、これに大学院生、助産学生を加えて、受講費無料の1年間コース『「妊娠中からの母子支援」即戦力育成プログラム09』を開始した。

現在、開講している育成プログラムの目的は以下である。①非就労助産師に最新の知識とステップアップした技能（と自信）を獲得してもらい、即戦力としての職場復帰を支援する。②高次医療施設の周産期医療スタッフの中から、総合的な知識と技能を持つリーダーを育成する。③現役助産師が、将来、交代勤務や宿直が困難になった場合にも多様な就業形態を選択可能にし、人材を埋もれさせない。④助産学生・看護学生、

就労・非就労助産師にコミュニケーション能力を獲得してもらい離職防止を図る。

3つの学びの場

周産期医療、生殖医療、地域母子保健の3つの柱(図1)のもと、現行の助産師教育の中では不足している知識と技能を獲得してもらうため、各種のテーマでセミナーを開催している(表1)。

周産期医療に関しては、臨床現場の医師、助産師を講師として、前期破水、多胎、胎児管理モニタリングなどの最新知識をテーマごとに1回完結のセミナーで学んでいる。また、新生児蘇生法やその介助法、新生児異常発見のための観察点など、通常的新生児室での勤務に有用な知識に加えて、早期産児や異常新生児の取り扱い上の各種の標準マニュアルなど、NICUでの勤務に必要な知識・技能を学習している。

生殖医療(不妊症、不育症)に関しては、不妊・不育のカウンセリングを行っている岡山県不妊専門相談センター「不妊・不育とこころの相談室」の生殖医療カウンセラー、死産女性へのグリーフケア(喪の作業)を実践している岡山大学病院産科助産師、体外受精など生殖医療施設で勤務する医療スタッフからなる生殖医療サポーターの会OKAYAMAに属する不妊認定看護師、胚培養士、助産師などから最新知識と技能を

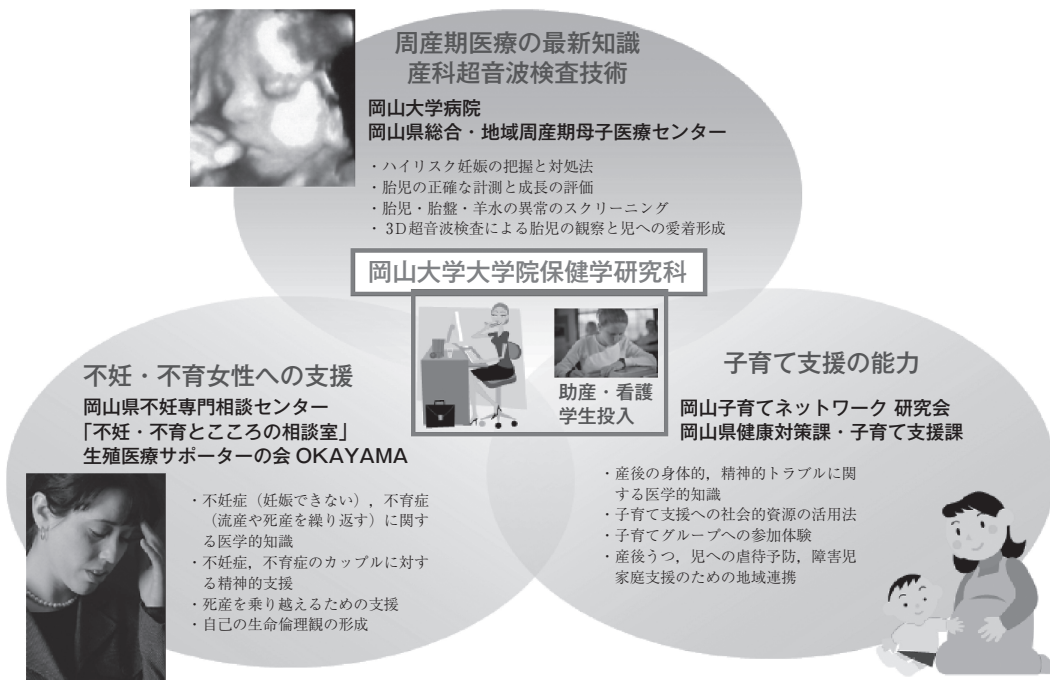


図1 「妊娠中からの母子支援」即戦力育成プログラムにおける3つの学びの場

表1 「妊娠中からの母子支援」即戦力育成プログラム・セミナー

第1日	胎児を観る：産科超音波検査の基礎と臨床
第2日	流死産女性を支える：流産・死産の基礎と臨床
第3日	赤ちゃんを観る：新生児の観察・ベビーマッサージ
第4日	子育てのリソースを知る：子育て支援の社会資源
第5日	公開セミナー 生と死の生命倫理：生殖・産科・NICUと生命倫理
第6日	破水を極める：前期破水・切迫早産の管理
第7日	胎児からの子育て支援：妊娠中からの虐待防止プログラム
第8日	不妊症を理解する：不妊の基礎と臨床・不妊女性の心理
第9日	助産師のための子育て講座：幼児教育・保育のプロからの提案
第10日	公開シンポジウム 「産科発の子育て支援」出産はすべての母子が通る道
第11日	産後女性を支える：乳房管理・産褥の精神支援
第12日	新しい分娩管理法：分娩管理モニタリング・院内助産所
第13日	「性教育」を創る：助産師の性教育
第14日	正常妊婦の落とし穴：正常妊娠の管理・栄養
第15日	NICU 入学生と卒業生：新生児蘇生法・NICU 卒後外来
第16日	多胎を極める：多胎の発生予防・多胎の管理

学んでいる。

子育て支援としては、社会資源の活用法、障害児支援、妊娠中からの児童虐待予防プログラム、各国の子育て支援、幼児教育・保育の専門家からの提案、こんにちは赤ちゃん事業の中での助産師の役割など、実践的な知識と技能を学んでいる。

これらのセミナーは、従来型の講演形式ではなく、演習(産科超音波検査シミュレーショントレーニング、新生児モデルによる蘇生・蘇生介助、ベビーマッサージ、乳房管理など)を組み込んでおり、また、研修(NICU、生殖医療施設、子ども広場などでの実習、見学)によって補完している(図2)。

シミュレーショントレーニング

超音波検査は、妊婦管理には必須の技術であり、産科医の施行した超音波検査データを理解するためにも各種の知識が必要である。また、助産師外来を行うためには、助産師自身が胎児の計測や大きな異常を発見することも必要になる。しかし、これらの能力を身につけることのできるカリキュラムは学部教育には存在しない。このため、超音波技術の習得のため、超音波検査装置による胎児立体モデルの計測、産科超音波シミュレーション装置(ウルトラシム)を使用した演習を行っている。また、新生児の蘇生技術、蘇生介助の技術の習得のため、新生児・小児の蘇生モデルを使

用したトレーニングを行っている。さらに、基礎的なカウンセリング技術の習得のため、模擬相談者、模擬患者を使用したカウンセリング演習などを行っている。

学習支援としてのe-ラーニング、夜間・休日の自己学習

受講生は、自身の妊娠、子育て、介護などを抱えていたり、北海道や九州など遠方から参加したりしており、毎回のセミナー参加が困難な場合もある。このため、セミナーやシンポジウムでの講演などからe-ラーニング用のコンテンツを作成し、自宅からの参加を可能にしている。また、参加した受講生がe-ラーニングにより復習をすることも可能である。コンピューターに触れることのなかった受講生には、基本的な操作法の指導、自宅にコンピューターのない受講生には、ノートPCの貸し出しなども行っている。

医療スタッフとしての望ましい学習習慣を獲得してもらう目的で、授業時間外も学習できるように夜間や休日にも学習室を開放し、文献検索、レポート作成を可能にするとともに、産科超音波シミュレーション装置や各種のモデルを使用した自己学習を奨励している。

受講生の評価とプログラムの評価

セミナーごとに小テスト、学習目標の自己達成度評価を行っている。また、プログラム修了生の能力を保



図2 育成プログラムの実際

1. 4D超音波検査の演習 2. 産科超音波検査シミュレーション装置による自己学習 3. 母体モデルなので、気兼ねなく練習可能
 4. 助産師と助産学生がともに学ぶ 5. 携帯用の超音波装置での演習 6. 死産の子どものための小さな服や帽子の作製 7. 新生児の挿管の演習 8. 挿管介助の演習 9. 模擬相談者へのカウンセリング演習 10. ベビーマッサージ指導の演習 11. 骨盤計測
 12. 「妊娠中からの虐待防止」でのグループワーク 13. 子育て支援の社会資源に関する講義の後に総合討論 14. 臨床スタッフも加わった生命倫理セミナー 15. e-ラーニング用のコンテンツ作成中 16. セミナー後の小テスト 17. 受講生へのテレビ取材

証するため、超音波検査、臨床研究、プレゼンテーションなどの種々の能力の試験や評価を行っている。また、このような客観的な評価の後、修了を認め、修了者には、文部科学省の「大学の履修証明制度」を活用し、岡山大学長より履修証明書を授与する予定である。

同時に、セミナーの講師の質を保証するため、受講生から各講師ごとに講義への評価をしてもらっている。さらに、受講生、外部委員による育成プログラム全体の評価をもらい、適宜、修正を行っている。

職場復帰支援と卒後研修支援

2007年度、2008年度の受講生にも、限定的ではあるが、本プログラムの公開セミナー、公開シンポジウム、また、各種関連団体の行う講演会（産婦人科医会の性教育指導セミナーなど）への参加を促し、卒後も研修を続けてもらっている。2009年度の受講者に対しても、卒後研修として、自己学習のための超音波シミュレーション装置の開放や実習施設でのボランティア活動参加等のコーディネートを行う予定である。また、就職活動のための情報をホームページ上などで発信しており、コーディネーターにより非就労者の受講者の職場復帰を支援している。すでに、過去のプログラム、現在進行中のプログラムの受講生にも職場復帰例が見られている。

地域貢献としての役割

直接的に地域貢献に関わる活動として、子育て支援グループの広場づくりなどの活動へのボランティア参加を奨励し、地域での性教育を行うことができる人材を養成している。

また、「岡山子育てネットワーク研究会」（子育て支援グループ、県の行政担当者、保育士、保健師、助産師、産婦人科医などの職域を超えたメンバーからなる組織）との合同の公開シンポジウム「産科発の子育て支援」を岡山大学鹿田キャンパス内で開催するなど、地域貢献としての役割を果たしている。また、受講生と「生殖医療サポーターの会 OKAYAMA」との連携

により、一般市民への講演会や医療対象者へのセミナーの開催、出張不妊相談への協力など地域に密着した各種の活動も行っている。受講生自身が、このような公開セミナー・シンポジウム、講演会にスタッフとして参加することで、企画、準備をする能力を養い、地元での活動に役立てることができる。

岡山大学大学院保健学研究科としての展望

岡山大学において、各地域での医療や保健行政におけるリーダーとなる実践力を持つ助産師を育成する。このリカレント教育の卒業生である助産師に対して、その後も継続的に講習やe-ラーニングのコンテンツを供給することで、岡山大学とのつながりを維持してもらう。また、更なるキャリアアップとして岡山大学での学士取得、修士取得への支援を行う。結果として、このような地域の核となる助産師と岡山大学とがネットワークを築くことができる。勿論、これらの事業は、岡山大学が行う地域の周産期医療、母子保健への貢献の一翼を担うことになる。

終りに

助産師は、産科医の代役ではない。周産期医療の崩壊を防ぐための助産師リカレント教育と聞くと、産科医不足を解消するためという先入観で見られがちであるが、それを求めるのは間違った方向である。助産師には産科医にはできない母子に寄り添う各種の仕事がある。例えば、超音波検査を行う目的も、産科医が行うような診断のためではなく、妊婦やその家族とゆっくりと胎児を見ながらコミュニケーションをとり、胎児への愛着を高めるといった要素が大きい。私達の行っている「妊娠中からの母子支援」即戦力育成プログラムでは、産科医の代役を育成するのではなく、多面的な視点を持ち、多様な環境に対応できるスーパー助産師を育成することを目指している。その結果として、助産師はやりがいを見出し活動性を増すとともに、産科医の負担も減り、周産期医療、母子保健の充実が得られると考える。